

前世記憶をもつ子どもたちの調査研究

——スリランカの転生のケースを中心に——

西 田 みどり

キーワード

転生、前世、記憶、スリランカ、家族

一 はじめに

同じような〈型〉を持った体験談が、時空を超えて存在するとき、その体験は普遍的なものである可能性がある。その一つが、子どもの前世体験だ。二歳から八歳くらいの子どもが、前世に住んでいたところや前世の両親について話し、恋しがって泣く、どうしても前世の家に帰りたいという、それで精神的に不安定になる……という体験である。中には住んでいた地名まで記憶しており、せがまれて連れて行くと、前世の家までスタスタと歩いていき、「ここが僕の家だから、あなたは帰っていいよ」と現世の母親に向かって言うこともある。

これと同じ〈型〉の体験を、現在のスリランカやインド、ドイツやフランス、アメリカの子どもたちが体験し、また日本ではNHKテレビで実例が紹介され^①、さらに大学の研究所で研究されて（アメリカのヴァージニア大学が先駆

者)世界のほとんどの国で同様の事例が集められているとしたら、その普遍性は強まる。ヴァージニア大学のジム・B・タッカー教授はすでに二五〇〇の事例を収集したと述べている。²⁾

本論文は、そんな前世研究の推進に貢献する三つの事例の報告である。いずれも筆者自身が前世を記憶している当事者および家族に直接、面接してインタビューを行った。その詳細な報告に入る前に簡単に先行研究に触れておく。

二 先行研究

前世というテーマを、科学的側面から、実証的に研究したヴァージニア大学医学部主任教授、イアン・ステイヴンソン³⁾は、インドやスリランカ、ミャンマー、ナイジェリア、タイなどに赴き、自らが面接して生まれ変わりの事例を収集している。その成果は『前世を記憶する20人の子供』、『前世を記憶する子どもたち』、『前世を記憶する子どもたち2』⁴⁾に収められている。前二冊の調査はアジア地域が中心であるが、『前世を記憶する子どもたち2』ではヨーロッパの事例が収集されている。そのあとを引き継いだタッカーは、主にアメリカに注目して事例収集を進めている。⁵⁾前述したように、ヴァージニア大学では現在二五〇〇の信頼できる事例を収集しており、南極以外のすべての国に生まれ変わりの事例があったということだ。保存するに値する事例は、六項目の条件のうちの二つを満たしていることを基準としている。⁶⁾客観的に評価できる事例の収集に努めているのである。

日本でも同型の事例はある。著名な国学者の手によって、八歳の子どもの体験の記録が残されている。岩波文庫に収められている平田篤胤の「勝五郎再生記聞」⁷⁾がそれだ。

同書に掲載された前世体験も同型のものだが、その記録のしかたに特徴がある。それがこの事例の信頼性を担保している。それはおおむね次の三点である。

一つ目は、公の役所の記録が掲載されていること、二つ目は、勝五郎に対してさまざまな立場の人が聞き取りを行っていること、三つ目は平田篤胤が古今の記録から似た体験を引いて「比較の視点」から評していることだ。

つまり、著者である篤胤は、勝五郎の体験を特異なこととしてというより、普遍的なものとして捉え、そのうえで、記録し、編集した。篤胤自身も勝五郎と何度も会って、機嫌を取りつつ質問を繰り返している。外出嫌い、人間嫌いの勝五郎が、篤胤の家に来たとき、篤胤との交流がよほど楽しかったらしく、「今日はここに泊まる」と言い張ったほどである。なだめられて帰ったものの、翌日また遊びに来ている。

篤胤が前世研究に躊躇なく取り組んでいるのは、魂の行方を見定めて安心を得ることが、学者としての精神を堅固に保つために必要だったからだという。それは同時に、篤胤の周辺にいた人々が希求していた死後靈魂の救済に応えることでもあった。篤胤の研究は、研究のための研究ではなく、自身が生きることと深く関係し、同時に篤胤を取り巻く人々の知りたいことに応えることでもあったのだ。そのために、古今内外の文献・資料を読み、伝聞に耳を傾け、实地調査（フィールドワーク）を行った。実証的な研究姿勢で明らかにしようとしている。これは文化人類学の研究方法である。この書に特徴的な前述の三点は、その姿勢が反映されたものだ。

勝五郎の前世記聞は、一八九七年、ラフカディオ・ハーンがアメリカおよびイギリスで出版した随想『Cleanings in Buddha-Fields』で取り上げられているため、海外ではよく知られている。⁹⁾

また、民俗学的立場からも事例収集は行われている。代表的なものが松谷みよ子の『現代民話考V あの時へ行った話・死の話・生まれかわり』⁹⁾に収められたものだ。収集方法がアンケートや聞き書きであるから大半が短いものであり、話の裏付けも取られていない。紹介の域は越えていないものの、各事例に類似性がある。

柳田國男は「先祖の話」の中で前世（柳田は「前生」と表記）について「勝五郎再生談」¹⁰⁾を引き「……是はもともと證明のむつかしい事柄であつて」としながら、続けて「當の本人が何かの拍子に、もしもさういふことを言ひ出したとすれば、もうそれだけでも信じないでは居られぬやうな、心理の素地とも名づくべきものは、却つて周囲の者の

間にすでに備はつて居たのである」と述べている。前世は空気のように浸透しており、そういう「事実」があつても否定せずに受け入れる素地があつたということだろう。実際、柳田の生まれた村では、初めての誕生日を迎える子どもに対して「おまへは何處から來た」と尋ねる儀式があつたのだそうだ。子どもが墓所や氏神の方向を指し示すと、人々は顔を見合わせずにはいられなかつたのだということである。

三 本研究の目的

本論文では、以上のような先行研究を念頭においたうえで、前世研究推進の一助となる事例を三例報告する。いずれも、筆者がスリランカのフィールドワークで出会つた前世を記憶する当事者とその家族に対して行つた面接調査である。面接した当事者の前世での死に方は、殺人・事故死・病死の三タイプである。いずれも男性から男性への転生である。女性から男性への生まれ変わり事例も面接したが、紙幅の関係で本論文では割愛する。

ステイヴンソンによると、スリランカではほとんどの事例が故人とはまったく無関係の家族のもとに生まれ変わり、同一家族内への転生事例はほとんどないのだという。

ところが筆者が面接した事例（病死のケース）は同一家族内に生まれている。また本論文では取り上げないが、もう一例、家族（親戚）に生まれ変わった事例も面接した。タツカーが事例調査について、生まれ変わり自体はどこでもあるが、そこに生まれ変わりを掘り起こす現地案内者がいるかどうかで事例を見つけられるかが決まると述べているように、筆者は幸運にも現地案内者の努力により、こうした事例と出会うことができた。これも本報告の意義である。以下、殺人、事故死、病死、の順で報告していく。

四 カマルの事例

四・一 事故死とされていた殺人

二〇〇三年、コロンボから車で二時間ほどのある村で、当時二一歳だった青年が井戸で足を滑らせて溺死した。井戸といっても日本のものとは異なり、深くはない。背の高い人なら立って足が届く程度で、つるべも付いている。水道が整備されていなかった当時、この井戸は村人たちの共同のシャワー場で、井戸に続いてコンクリートの洗い場もあった。村の皆が使用し、事故など起こったことのない極めて安全な場所である。そこで、頑健な若者が溺れ死んだ。この奇妙な「事故」を不審に思わない村人はいなかった。しかし「事故」として処理され、歳月が流れる中で、彼の存在は家族以外からは忘れ去られていった。「事故死」した青年の名はタンビラニヤという。

その「事故」の真相が明らかになったのは一〇年後の二〇一三年である。一〇〇キロほど離れた村に住んでいるカマルという八歳の少年が、母親と一緒に、タンビラニヤの家に突然訪ねてきた。少年は家に入って来るなり、こう言った。「ここだ、ここが僕の家なんだ」。

彼はタンビラニヤの生まれ変わりで、自分が殺されたこと、犯人は二人いることを詳細に記憶していた。この奇妙な「事故」は実は殺人であったことが、前世の記憶を持って再生した子どもによって明らかになった。

面接したのは二〇一四年一月四日、まずタンビラニヤの父親・バンダから行った。製材所で働いている。

四・二 前世の父親バンダの話

——息子さんと、その生まれ変わりの子どもさんについて、話していただけますか。

バンダ「私の長男で、最愛の息子だったタンビラニヤは二〇〇三年に亡くなりました。そして一〇年経って、タンビラニヤが生まれ変わって来たのです。その子カマルが訪ねてきたのは昨年（二〇一三）のことです。どうしても行きたいと言つて親に無理を言つて、うちまで来た。私は仕事で職場にいたので後で聞いたのですが、妻が家にいると突然やって来て、妻の手を取ると『おかあさん』と叫んだらしい。で、手を引つ張つて近所中を回り、この人はCさん、この人はDさんと、近所の人の名前を当てていったそうです。

家の前にあつた自転車を見て（壊れていた）、『これは僕の自転車だけど、どうして直さないの』と言つた。また、タンビラニヤが生きていたころは家の前に大きなマンゴーの木がありました。それを伐つてしまったので『どうして伐つてしまったの』と訊かれた。カマルが来たとき、なかつたからです。そのときカマルは八歳でした」（八歳ということ、タンビラニヤが亡くなつて二年後に再生したことになる）。

——ほかに何か、明らかに生まれ変わりと確信できるような行動はありましたか。

バンダ「井戸を見て、ここで死んだんだ、と言いました。自分で井戸まで行つたのです」

——井戸は近いのですか。

バンダ「家からは少し離れています。広い原っぱを横切つていく。湿地帯なので細い道を足を踏み外さないよう注意して」

——カマル君はその道を知っていた？

バンダ「そうです。どんどん行つて、私たちは後ろから付いて行つた。井戸に着くと、ここで二人の男に後ろから頭を殴られて、井戸に落とされた、とはつきり言いました。それまでは、足を滑らせて落ちたのだということになつていた。でもそうではないことがわかつた。今、警察に連絡して事件を調べ直してもらつてるところです」

——でも警察で、小さい子の、しかも生まれ変わりの子どもが話したことを信用して、調べ直すなどということをしてくれるのですか。

バンダ「それはやりません。法律でも、裁判でも、前世の人の証言など相手にしません。私たちは、ただ調べ直してくれるようにと依頼しているので、そうなる警察は調べなくてはならないのです」

——犯人はこの村にいるのですか。

バンダ「直接手を下した二人のうち一人は事故で死にました。もう一人は行方不明です。カマルが言うには、井戸の手前で二人とケンカになり、後頭部を殴られて井戸に落とされた。私たちにはわからない。滑って死んだと思っていた。殺されたとは知らなかった」

——でも犯人が死んでいたり、行方不明なら、確かめようがないわけですね。誰か見ていた人はいなかったのですか。
バンダ「見ていた人はいたのです。その人はでも、頭がおかしくなって精神病院に入院した。長く入院していたが、今は村に帰っています」

——殺人の現場を見たことで、おかしくなったわけですか。

バンダ「そうです」

——今、村にいるわけですね。

バンダ「そうです。亡くなった息子と同一年です。でも彼は話さない。話すと殺されるからです。手を下したのは二人ですが、仲間がいる」

——ではどうやって警察に動いてもらうのですか。

バンダ「届け出たのは半年前です。私たちは結果が出るのを待っています。犯人に直接尋問できないので、難しい状況ではありませんが」

——ご長男が亡くなられてとても悲しかったと思いますが、生まれ変わってきている子に会って、どんな気持ちでしたか。

バンダ「五年くらいは悲しくて悲しくて仕事も手につきませんでした。私には三人の息子がいるのですが、あの子

はいちばんいい子でしたから。今の生まれ変わってきた子どもとかなり似ているところがあります。顔も似ているし、歩き方も同じ。だから、彼に会って私はものすごくうれしかったのです。最初に家に来て、二週間泊まっていきました。その後は、毎週土曜日に家に来ていました。土曜日に連れてきて、日曜日に先方が迎えに来た。うちで泊まるときはいつも私と一緒に寝るのです。私が抱っこして寝る。亡くなった子も、死ぬ前まで私とずっと一緒に寝ていました。死んだときは二一歳でしたが、そのときも一緒に寝ていました¹⁶⁾。

カマルの家族は、両親とおばあちゃんと姉ですが、おばあちゃんと父親はうちに来ることに反対しています。カマルはその家族ではただ一人の男の子だからです。跡取り息子です。私たちがタンピラニヤをものすごく愛しているから、彼らは怖かった。取られてしまうのではないかと思ったでしょう。カマルも、こちらのほうを自分の家だと思っているから」

——カマル君に会いたいですね。

バンダ「勤務時間は五時までなので、そのあとご案内してもいいですよ。とりあえず家内に電話します。もっと詳しく話せるでしょう」

そう言うとケータイ電話をポケットから取り出し、家に電話し始めた。

四・三 前世の母親スジャータの話

——亡くなられたタンピラニヤさんはどんな方でしたか。

スジャータ「私と、ものすごく近い関係でした。この息子（同席していた二一歳の末っ子・スーリヤ）も近いですが、それ以上にとっても親しかった。朝、みんなが学校や仕事先に出かけますが、この子の写真はいつも肌身離さず持っていました。夕方帰ってくるのは分かっているのに。」

この子が死んでからも、私は、どうしてもこの子に会いたい、見たい、どうしても会いたいという考えを持ち続けていました。そして毎日祈っていました。『もう一度会うことができるように』と。その願いがかなったわけです」

——最初にカマルが来たときのことを話していただけですか。

スジャータ「私が家にいたとき、突然入ってきたのです。『おなか、すいた』と言って。その子が誰なのかは全然わからなかった。次男は学校に行っていなかったし。飾ってあった写真を見て、『これは僕だ』と言いました。そして『長く住んでいたのはこの家だ、ここは僕の家だ。ここにいるのは僕のお母さんと弟だ』と同行していた母親に言いました」

——面影はありましたか。

スジャータ「はい。それで現世の母親は『知らない家に来て、ごはんを食べさせろと言って、ぱくぱくごはんを食べるのは行儀が悪い。何でそんなことをしているの』と言って、叱っていました。でもその子は『ここは僕が長く住んでいた家なんだ。あなたはもう帰ってください』と言いました」

——自分の母親にそう言ったのですか。

スジャータ「そうです。そのときお母さんは泣きました。私はわけがわからなかったので、説明してくれるよう頼みました。その説明はこんなものでした」

へこの子は私が産んだ子に間違いないのですが、二歳のころ「ここは僕の家じゃない」と言い始めました。ようやくカタコトで言葉を話し始めたころです。そう言って「僕の家に戻りたい」と泣くのです。毎晩です。でも、私たちは耳を貸しませんでした。小さい子がわけのわからないことを言うのは、よくあることですから。

この子は自分が生まれた村の名前まで言っていました。この村です。カマルが通っている学校からはそう遠くはないのですが、私たちは今父親の実家に住んでいますから、結構遠いです。毎日トルビラ（三輪車型のタクシー）で送

り迎えをしています。今日も学校に迎えに来て、いつものように帰ろうとしたのですが、カマルがどうしても行きたくて張り張るのでしかたなく連れてきたのです」

家はすぐにわかった。カマルが道案内をしたからである。村に入ったら「その道をまっすぐ行って、次を左……」と言い、途中の橋のところで「新しい橋ができたんだ。前はこの橋はなくて車は通れなかったのに便利になったね」と言ったという。家に着くと、勝手知ったる我が家という感じでどンドン入っていった。おなかをすかせており、出された料理を全部平らげた。

スジャータ「最初はその理由がよくわからなかったのですが、タンピラニヤがシャワーを浴びに行つたのは午後二時一〇分ところで、おなかをすかせていました。いつもそのくらいの時間に食事をするからです。シャワーを浴びてから食べようということで、私は食事の用意を待っていたのです。おなががすいたと言うのは、死んだときにしていたからだ。それに気づいたとき、ものすごく感動しました」

——カマル君が、自分が殺されたとはつきり言つたのは、いつごろですか。

スジャータ「それは、ある夜のことなのですが、この家で遊んで、その後実家に帰りました。そうすると、実家のほうで『頭が痛い』と言いだした。『頭が痛い、頭が痛い』と言うので、病院に連れて行つたそうです。でも、何も病気の兆候はなかった。そのときに『後ろから頭を叩かれて井戸に落されたんだ』と、カマルは自分が死んだときの状況を説明した。

そういう話をするので、あちらのお母さんが私に電話してきました、こういうことを言っているが、そういうことがあったのですか、と。私は、それを聞いて、『そういうことを言っているのであれば、それをだれにも話さないようにと言ってください。もし、実際にそうやって殺されたのであれば、犯人はどこかにいるでしょうし、耳に入ればカマルが殺されるかもしれない。ですから決してその話を他の人に漏らさないようにしてください』。

そう伝えました。そのときカマルは自分を襲った人間の名前まで言ったそうです。後ろから殴った人、井戸に突き落とした人、二人の名前をあげて話したそうです」

（前世の母スジャータの話と、前世の父バンダの話には時間差がある。前世の記憶は何かきつかけがあつて話されるようだ。子どもに改まって面接したときは「思い出せない」という返事が返つてきても、一緒に遊んだりしていると、ぼろつと前世の記憶らしきものを口にするところがある。カマルの場合も、今回の調査時に、前世の母スジャータと弟スーリヤ、そして近所に住むカマルと年齢の近い少女も伴つてレストランに食事に行つたり、その近くの個人寺院に遊びに行つたりして、観察していると、スーリヤを「弟のくせに」という言うこともあつた。

四・四 生まれ変わりの子どもに会う

カマルに会つたのは、その日の夕方である。現世の母親の実家である近隣の村で暮らしていた。スジャータの案内で、カマルの家に向かつた。

直接のインタビュは難しかつたため、前世の母親（スジャータ）を通して話を聞いてもらった。現世の母はレバノンに出稼ぎに行つており会うことはできなかった。現世の父親はパン屋を営んでいるので留守だつたうえに、生まれ変わりを迷惑がっていたためインタビュはできなかった。前世の母・スジャータは、カマルを膝に抱き上げ、解きほぐすように話を聞いてくれた。外国人の来訪に戸惑っていたが、後頭部を指さしつつ、「僕のここを殴つたの」などという生々しい話を聞いた。

五 アナガーリカの事例

五・一 ヘリコプター遭難事故死

アナガーリカは現在一五歳の中学生である（二〇一四年現在）。スリランカ有数の国立名門中学に通い、数学が得意な少年だ。前世の記憶らしきものを話し始めたのは一歳半のときで、最初に話した言葉が「コパラプレン」だった。母親には意味がわからなかった。二歳になると「ヘリコプター」と言い、

「四人乗っていた」

「ヘリコプターにはドアが二つしかない」

「僕は軍人学校で勉強していた」

と言った。

赤ん坊のときから飛行機が好きで、家の中で授乳していても、飛行機の飛ぶ音が聞こえると興奮して盛んに外に出たがった。表に出て飛行機が飛ぶのを見ていると機嫌がよかった。その反対に、雷と暗闇を異常に怖がった。強い雨が降り雷が鳴ると、パニックに陥り、机の下に隠れてふるふる震えている。稲光が光ると恐怖でおもらしをすることさえあった。高いところを怖がるのも尋常ではなかった。子どもはジャングルジムや滑り台で遊ぶものだが、アナガーリカは高いところへは決して登らない。バドミントンをしていて羽根が木に引っ掛かっても取りに行くことはできなかった。

幼いころから、もの静かな子どもで、たまに話すことといえ、おおよそ子どもらしくないことばかりだ。

「僕たちの乗っていたヘリコプターは海に墜ちた」

「僕は軍人学校で操縦を習っていた。二〇人くらいのクラスだった」

「ヘリコプターを操縦するときは耳に大きな何かを付け、マイクで話す」

「四人で海に墜ちた。海に流された。暗いから何も見えなかった」……

とにかくヘリコプターについてはいろいろなことを話したという。両親はやがてそれが前世の記憶らしいことに気づき始めた。しかし、無視した。特に父親は、母親に対して、強く無視するように命じた。スリランカは父権社会であるから、夫の命令は絶対である。

いくら話しても無視されたためか子どもはしだいに言葉を発さなくなり、考え込むようになった。両親にはそれが心配の種であった。感情は不安定で、時折「僕の家を探してくれなかったね」と怒り出すこともあったという。

そんな不安定な状態が続いたため、両親はついにスリランカの前世研究者・J氏^[17]に相談し、新聞を通してアナガールカの前世に関係している人を探すことにした。「Rivira Sunday e-paper」、日本で言えば朝日新聞のようなインターネット向けの新聞である。新聞に掲載されるとしばらくして、自分の兄のことではないかと問い合わせてきた人がいた。手広く事業を行っているキャリアウーマンのナンダー・シルバである。

五・二 前世の妹ナンダー・シルバの話

スリランカ最大の都会であるコロンボ市に程近いマンシヨンの六階がナンダー・シルバの住まいであった。豊かな暮らしであることが住まいからも見て取れる。彼女の第一声は、「あの子はだいたい落ち着きましたか」であった。アナガールカはそれほど不安定だったのだろうか。時間経過を追う形でインタビューを行った。

——新聞記事をご覧になったときの感想をお教えてください。

ナンダー「コパラプレンということをお話している子どもがいる。コパラプレンで死んだ、四人と一緒に海に墜ちて死んだ、という。その新聞記事を読んで、もしかしたらと思い、連絡を取ったのです。新聞には『雷が怖い。大

きな音にもおすごく敏感で怖がる。恐怖でおもらしをすることもある』とも書かれていました。

私の一つ上の兄、デシヤマンニィ・シルバはヘリコプター事故で亡くなりました。私の下の妹は五歳くらい離れているのですが、私と兄は一つ違いで、いつも一緒にいました。たった一人の男の兄妹でした。兄の事故についてそれまでに聴いていたのは、台風による強風で雨も降っていた、雷がひどかったということです。でも、ヘリコプターに乗っていた兄以外の三人は助かっています。漁師がちょうどそこで漁をしていたので、海に投げ出された三人は助けられたのです。

でも、兄は、パイロットでシートベルトをしていたし、ヘリコプターに閉じ込められている状態だったので、どんな流されていった。その流されていく様子をみんな見ていたそうです。暗い海でしたが、時折稲妻の光で流されていく兄の姿が見える。兄は手を上げて『助けて』というように助けを求めていたという。北の海のほうです。

亡くなったのは墜ちたからではなく、ヘリコプターから脱出できなかったからです。ヘリコプターとともに沈んでいった。ですから、台風、強い風、雨、雷……そんなものが死ぬ瞬間の兄の目に映っていたでしょう、強い恐怖感とともに。

新聞を読んだとき、私は、兄の死んだときの状況ととてもよく似ていると思いました。兄が死ぬ前に見たものを、この子どもは見ている。それで、連絡を取ったのです。家まで訪ねてきてくれないかと頼みました」

——どこかで会うとかではなくて、家までということですね。

ナンダー「はい。というのも、母は、兄が亡くなったショックで動けなくなってしまう、病気で寝たきりになっていたからです。エルサイマという病気で、体が完全に固まってしまい、動けない。話さない。寝たきり状態です。ですから外出することはできません。

アナガリーカ君が来たとき、家には女性だけでした。母と姉妹です。父はいなかった。というか、わざと父が留守の日を選んだのです。バカなことをして、と言われそうだったので。

彼はJ先生と一緒に来ました。この家ではありません。当時住んでいたのはコロンボ市のBという地域です。私たちの育った家はそこで、両親と一緒に住んでいました。

でも、実際に彼が来たとき、私たちは母と直接会わせるのは危険だと考えました。ショックを受けるかもしれないと考えたのです。で、まずデシヤマンニイの写真がたくさん貼ってあるアルバムを渡して、それを見ていてくれるように言いました。

アナガリーカに最初に会ったとき、雰囲気は兄に似ていると思いました。兄はとても静かな人で口数は多くなかった。アナガリーカもそうでした。幼いのに静かな子で、行動も似ていて、急がないでゆっくりと写真を見る姿が兄と似ている。そうやって写真を見ていたアナガリーカの姿を今でもよく覚えています。

ゆっくり写真を見ながら、笑い声を上げることもありました。どんな写真で笑ったのかと見ると、それはパキスタンに行っていたときのもので、友達と一緒に写っている写真です。友達の顔を見て笑っていた。

その友達は今スリランカの空軍で働いています。高い地位に就いている。彼の親友でした。何も言わないですっと静かに写真を見ていた少年が、突然笑い出した。私は不思議に思っ『この人、知ってる?』と聞きました。少年はにっこりして頷きました。そのとき、とても感動しました。アナガリーカは一〇歳でした」

五・三 前世の母との対面（ナンダー・シルバの報告）

——お母様との対面はどんなふうでしたか？

ナンダー「母はそのとき病気のため肌が黒ずんでいて、見た目がかなり気持ちの悪い状態でした。子どもがどんな反応を示すか心配でした。母を何とかベッドから起こして椅子に座らせアナガリーカが見えるような状況にしてから、母の部屋に彼を呼び入れました。

そうすると、アナガーリカはためらひもなく母のそばに行き、その足元にひざまずいて、とても丁寧な挨拶をしました。スリランカでは目上の人を尊敬していますから、足元にひざまずいて挨拶するのは当たり前ではあるのですが、この子どもはすぐに母のもとに行つて、そういう動作をしたのです。私たちは母について何も紹介していません。それなのにその子は部屋に入るなりそんな行動をとつた。私たちはとても驚きました。

もつと驚いたのは母の反応です。母は寝たきりになつて以来、言葉を発したことがありません。それなのにひざまずいたアナガーリカに『私の息子』と言つて手を差し伸べると、その手を握り締めて抱き起こしたのです。私たちは、今までひと言も発しなかつた母が、突然しゃべつたので驚きました。アナガーリカはその後も、母を気持ち悪がりもせず、そばに座り、動こうとしませんでした。彼は何も話しませんでした。ただ、母のそばにじつと座つて静かにしていた。そして、帰る時間になつて、そのまま帰つて行きました」

——ナンダーさんや、その下の妹さんのことは覚えていたのですか。

ナンダー「五歳下の妹のことはすぐにわかりました。デシヤマンニイは妹がとても好きだつたからです。事故で亡くなる二週間前に妹の誕生日パーティーがありました。北のほうの駐屯地にいたのですが、大好きな妹の誕生日パーティーにどうしても出たいと言つて、かなり無理をして家に戻つてきました。それほど妹が好きだつたのです。ですから、アナガーリカが家に来たとき、その妹もいたのですが、すぐに前世の自分の妹だとわかりました。私のことはどうでしょうか。私は外見がとても変わつてしまつたので……。確認はしませんでした。それで彼らは帰りました。特に大騒ぎすることもなく静かな対面でした」

五・四 前世の父との対面（ナンダー・シルバの報告）

——お父さんと会わせたいのはいつのですか。

ナンダー「父とアナガリーカが初めて会ったのは、ダーナ儀礼のときです。コロンボ市にある実家で行いました。父は鉄道関係の仕事に就いていた関係で、私たち家族は父の現役ときは宿舎に住み、実家は人に貸していた。父が定年退職したあと、その家に戻りました。儀礼はその家で行われました。デシヤマンニイが生まれた家です。でも、住んでいたのは幼いころだけで、彼が事故死したとき、家族が住んでいたのは宿舎のほうでした。

儀礼は僧侶を呼んで行きます。年に一度僧侶に頼んで行う儀礼で、ごく一般的な仏教行事です。アナガリーカはその儀礼にやって来ました。でも、父には彼が来ることは内緒にしていました。この儀礼のとき、家にはたくさん親戚が集まっていました。親戚ですから皆よく似ている。父親と同じ年配の男性は四、五人いました。アナガリーカには後ろのほうにいてもらい、どの人が父だとは教えていなかった。でも、アナガリーカはそのときもう、同行していた母親に『お母さん、お父さんいるよ』と言っていました。

儀礼が終わり、お坊さんが帰ると、私はアナガリーカを連れて『この人知ってる?』『この人は?』と一人一人を回つてあるきました。子どもは、実家の周囲に住んでいた人は誰も知りませんでした。なぜなら彼がこの家にいたのは幼い頃で、育つたのは宿舎でしたから、誰も覚えていなくて当然です。でも、親戚は全員、覚えていました。

で、お父さんを見つけてくださいと言っていると、すぐに見つけて『お父さん』と呼びかけた。でも父親のほうは気づかない。『なぜこの子は私をお父さんと呼ぶのだろう』と不思議そうな顔をしている。でも、かわいい子どもの言うことだから、アナガリーカを自分のかたわらに呼び寄せて『なぜ私をお父さんと呼ぶのだい』と言いつつ、膝の上に抱き寄せた。すると、アナガリーカは父親に抱きついてその頬にキスをしたのです。

それから、私たちはすべてを説明しました。すると父は泣き出しました。父は強い男です。人前で泣くなどということはない。また、デシヤマンニイをとでもかわいがっていた。子どもの中のただ一人の男ですから。父は心から嬉しかったのだと思います。その後は、アナガリーカに会うために彼の家まで行ったりして、亡くなるまでずっと親しくしていました」

——では、お父さんはすぐにアナガーリカが息子の生まれ変わりだと理解したわけですね。

ナンダー「そうです。自分はこんなに年老いているのに、その膝に乗ってきた。白髪頭なのに頬にキスをしてきた。あの静かな子で雰囲気が亡くなった息子ととてもよく似ている。それで息子の生まれ変わりだと認めました。そして、亡くなるまでアナガーリカとのつながりは続けました。家に行ったりアナガーリカ君を家に招待したり。兄の愛用していたものをプレゼントしたりしていました」

——ナンダーさんがアナガーリカ君をお兄さんの生まれ変わりだと思うのはなぜですか。

ナンダー「それは、母が、あれほどの重病に侵されながら死ななかつたことです。いつ死んでもおかしくない状態だったのですが、母は自分の子どもを待っていた感じでした。で、あの子に会って三カ月後に亡くなった。満足していたのではないかと私たちは思っています。二〇〇九年三月にアナガーリカに会って、六月に亡くなりました。

アナガーリカを抱っこしたときの姿、その目、その様子……私たちは母の喜びを深く理解しました。そのころの母というのは、前にも言ったように見るも無残な姿で、やせほそり、肌は真っ黒、死体のような感じで、実の娘の私たちでさえ怖いような外見だったのです。でも、あの子はまったく怖がらず母を抱きしめた。それだけでも私たちはびっくりしたのです。そんな母を抱きしめる人など、まずいません。父は翌年の二〇一〇年に亡くなりました。生まれ変わりの子どもをとてかわいがって、死の直前までアナガーリカに会いに行っていました」

——それでアナガーリカを生まれ変わりだと信じるわけですね。では、気持ちの上では、どうでしょう。彼はあなたのお兄さんですか。

ナンダー「確かに、気持ちの上では兄に対するような感情は出て来たとはいえない。それは年齢的なこともあるでしょう。彼は小さな子どもですから。でも寝たきりだった母が立ち上がって歩いたことや、父の満足した様子を見ると、彼は確かに兄の生まれ変わりだと思います。また、私も彼をかわいいと思います。でも、その思いは、兄に対するものとは明らかに違っていて、彼が兄の代わりになるわけではありません」

——とすると、ご両親は、自分の亡くなった子どもに対するのと同じ愛情がアナガリーカに対してあったというところで、あなたの場合はそうではないということでしょうか。

ナンダー「アナガリーカに会ったことで母の顔がガラリと変わり、笑いが出てきました。動くこともできるようになった。その奇跡的な変わりように私たちは泣きました。でも、私の気持ちは兄に対するような尊敬の思いは湧いてきません。自分の子どもに対するようなかわいさはあるのですが。

私の父は精神的にとても強い、厳しい人です。私の子ども、つまり孫を膝に抱きあげるなどということはしなかった。お酒も飲みますし。子どもはお酒のにおいが嫌いですから。でもアナガリーカはそんなことは全く気にしないで、父の膝に乗って、それで父は泣き出してしまった。あの強い父が。それを見ていたから、父がどのくらい感動したかを見ていましたから、私たちは彼が兄の生まれ変わりだと思うのです。

それから、アナガリーカの状況もそれが真実だということを物語っています。アナガリーカは精神的にいらいらしていて非常に落ち着かない状態だったそうです。いつも何か不安定でいらしていた。それが、母に会い父に会ったことですっかり落ちていて普通の状態になった。それも一つの証明になります」

——生まれ変わりが見つかったことで心の変化はありましたか。

ナンダー「兄が生まれ変わってきたこと、それは完全に信じています。でも、だからといって私の悲しみがなくなっただけではありません。兄が亡くなって、母は病気で体が動かなくなりました。父は兄の死後、お酒をたくさん飲むようになって、それが死んだ原因です。兄の死は私たち家族を不幸に陥れたのです。みんな不幸になりました。

兄が亡くなった苦しみ悲しみはなくなりません。兄とこの子どもとはまったく関係ありません。兄ができたことをこの子どもができるわけではない。兄は兄、その子はその子です。魂の連続は信じていますから、生まれ変わってきているのは嬉しい。でもそれだけです。私たちの心の苦しみはなくならない。父母は兄の死の悲しみが原因で亡くなりました。私たちが苦しい。それは全然変わりません。母が戻るわけではない、父が戻るわけでもない。私の苦しみがなく

なるわけではない。

私のフェイスブックのホームページには兄の写真を載せています。ヘリコプターと一緒に写っている写真です。兄の誕生日は、今でも私にとって特別な日です。私たちの悲しみは生まれ変わりが見つかったからと言って癒えるわけではないのです」

五・五 生まれ変わりの子どもに会う

アナガーリカ君へのインタビューは、彼の家の居間で母親立ち合いのもとに行われた。もうすっかり落ち着いていて、そのため前世の記憶は遠のいているようだった。

——まだ、何か覚えていることはありませんか。

アナガーリカ「今覚えていることは少ないですが、ヘリコプターのこと覚えています」

母「ヘリコプターのことを訊くと悲しみます。目の感じが変わってしまう。よほど辛い体験だったのでしょ」

——暗いところは怖いですか？

アナガーリカ「子どものときは怖かったけど、今はもう怖くありません。雷も怖くなくなりました」

——どうしてでしょう。

アナガーリカ「理由はわかりません」

——死後の世界をどう考えますか。

アナガーリカ「信じています。前に死んだ人が自分だということは、わかっているのです」

——前世のことでまだ覚えていることは何ですか。

アナガーリカ「雷に当たったような感じがした。それで墜ちたのです。それはよく覚えている」

——ヘリコプターですか。

アナガーリカ「はい。僕が操縦していました。墜ちたとき僕は外に出られなかった。何かに挟まっていて外に出られない」

——操縦席に挟まったのですか。

アナガーリカ「墜ちた。墜ちてからのことはよく覚えていない。でも挟まっていた」

——操縦していたときのことは覚えていませんか。

アナガーリカ「以前乗っていたとか、操縦していたとか、それはまったく覚えていない。その墜ちた瞬間だけ覚えている。その日のこと、そのときのことだけ。それ以前のことは覚えていない」

——墜ちる瞬間だけですか。

アナガーリカ「そうです。それは覚えていません」

——記憶は恐怖としてあるのですか。

アナガーリカ「はい、そうです」

——一緒に乗っていた人については何か覚えていますか。

アナガーリカ「顔は覚えていない」

——人数は覚えていませんか。

アナガーリカ「僕を入れて四人です」

——なぜ四人だと覚えているのですか。

アナガーリカ「思い出すと、何か見えてくる。何か情景が浮かんでくる感じですよ」

——そこに自分がいる感じなのですか。

アナガーリカ「そうです。そこにいるような感じですよ」

——お父さんに会ったときはどんな感じでしたか。

アナガリーカ「J先生が僕を供養儀礼に連れて行きました。そこにお父さんがいた。すぐにわかりました。体が『お父さん、お父さん』と言っていて、不思議な感じでした。それですぐに一緒に来ていた母（現世）のところに行つて『お父さん、いるよ』と伝えました。あんな不思議な感覚になつたのは初めてです」

アナガリーカは前世の父母に会つて、前世の自分を確認して、ようやく落ち着きを取り戻し「アナガリーカ」としての現世を生きはじめた。アナガリーカにとつていいことは、前世で学んだことが現世に受け継がれていることだ。数学の能力と操縦能力である。アナガリーカは数学が得意でいつも満点だという。ヘリコプターと飛行機の操縦方法も習わなくてもわかるようだ。あるとき、学校の近くでヘリコプターの展示会があつたとき、アナガリーカはその操縦席に座ると、どのようにして操縦するかをとうとうと説明し始めたのだという。

六 アスリパーラの事例

六・一 腎臓移植後の病死

この面接は前世を記憶しているアスリパーラの家の居間で両親立ち合いのもとに行つた。両親立ち合いの場合、当事者が話す前に両親が説明するという事態が生じやすい。反面、子どもがリラックスするという利点もある。この面接ではできるだけ当事者に発言させるようにした。

アスリパーラ君は現在一三歳、中学一年生である（二〇一四年現在）。黒目がちの大きな目が印象的な少年だ。両親との三人暮らしで、兄弟はいない。前世の記憶はまだハイハイしていた六カ月ごろから出てきたという。スリラン

カの家では、家族の写真を壁に掛けたりテーブルの上に飾る習慣があるが、アスリパーラはその飾られた写真を見て、それは自分であることを意思表示したのだという。

——そんな小さな子がどうやって知らせたのですか？

父親「六カ月ごろ、まだハイハイしているころから、少し言葉も話しはじめました。カタコトですが。で、この写真までハイハイして行き、指さして『ぼく、ぼく』と言うのです」

——（アスリパーラに）覚えていますか？

アスリパーラ「覚えています」

父親「七カ月〜八カ月になると、この写真に写っている人の名前を言うようになった。デシャマンニイという名前で、私の兄です。そして、私のことを『弟』と呼びました。父親なのですが、彼は『弟』と呼ぶ。そうとしか呼ばない。学校に入ってから『パパ』と呼ぶようになったが、それまではずっと『弟』と呼んでいました」

母親「今でも、たまに『弟』と呼ぶことがあります。特に父親に対して何か許可を得たいことがあるとき『スルマンリ（かわいい弟）』と呼ぶ。何か買ってほしいとき、店なんかに行つたとき、そう言っておねだりします。

私に対しては、プレゼントをくれたことがあります。九月二五日が前世での結婚記念日なのですが、そのときに、ネックレスのつもりなのか、糸を首飾りのようにして首にかけてくれました。『今日は結婚記念日』だからプレゼントしてくれたのでしょうか」

この会話の流れから、ある程度おわかりいただけるように、生まれ変わってきたアスリパーラの現世の父親は、前世での弟であり、現世の母親は前世の妻に当たる。家族の中に再生してきたというスリランカではめずらしいケースだ。人間関係が複雑なので整理しておく。

転生した子ども——アスリパーラ

アスリパーラの前世——デシヤマンニイ

アスリパーラの現世の父であり、前世の弟——ソマシリ

アスリパーラの現世の母であり、前世での妻——スワルナ

六・二 生まれ変わりの子どもの話

アスリパーラの家はアンティークな家具を製造する家具屋であり、また製材所でもある。家の横に大きな工場があって、木材が積み上げられている。祖父の代からの製材所で、デシヤマンニイも家業を継いで父親とともに仕事に励んでいた。

——仕事について覚えていることはありますか。

アスリパーラ「お父さんの仕事を受け継いでやり続けたような記憶がある。ココナツの木を買って、家とかを造るための木材に加工して売った。その仕事をお父さんがやっていたので、僕はそれを手伝い、継いだ」

——仕事しているときに誰かに騙されたとか、支払わないで逃げた人とかはいなかったですか。ひどく困ったことは？

アスリパーラ「覚えていません」

父親「一歳半くらいのおとき、たくさん話しました。夜七時ごろ、ちょうど寝る前のうとうとしている時間帯になると、ずっと話していました。今はもう本当に話さなくなりました」

——結婚したおときは覚えていますか。

アスリパーラ「仕事を継いで五年くらいしてから結婚しました。仲人を介しての結婚でした」

—— 仲人には自分から頼んだのですか。それとも先方から紹介があったのですか。
アスリパーラ「思い出せません」

ここで父親が補足説明をする。

父親「仲人は父の仕事の関係者でした」

(結婚式の写真を見ながらアスリパーラに質問した。花嫁は現在の母親である。デシャマンニイは長髪で耳を隠している)。

—— (花婿を指して) これは誰ですか？

アスリパーラ「僕です」

—— 変わったへアスタイルですね、長髪で。どうして耳を隠しているのですか。

アスリパーラ「耳が大きくて恥ずかしかったので、耳はいつも隠していました」

—— 覚えているの？ どうやって思い出すのですか。

アスリパーラ「思い出せます。死んだときのことも覚えています。製材所で働いていて木を加工したりする仕事をやってきた」

—— 学校は覚えている？

アスリパーラ「はい」

—— 学校について何か覚えていることはありますか。

アスリパーラ「郵便ポストに石を入れて逃げた。他の友達に逃げ切ったけれども、僕だけ捕まったということ覚えていてます」

—— 誰に怒られたの。

アスリパーラ「それは覚えていない」

——前世でいちばん楽しかったのはどんなことですか。

アスリパーラ「ウエサク祭です」

——では、いちばん悲しかったことは？

アスリパーラ「弟が死んだことがいちばん悲しかった（この弟とは現世の父親の下にいた弟のこと）。僕が一〇歳のときです。頭に水がたまるという病気で亡くなりました。今思い出そうとすると煙の中のようにはつきりしません」
現在のアスリパーラの記憶はかなり失われているが、幼い頃話したことや、両親の話をまとめると、以下のようになる。

父の仕事を継いで製材所を営んでいたデシヤマンニイは、ある日病に倒れる。腎臓病だ。重症で腎臓移植が必要だと言われるが、当時のスリランカには移植設備を持った病院はなく、提供者もいなかった。そのため薬で何とかもたせようと、毎日服薬していたが、その薬はたいへん高価で月に一万ルピーかかった。そのお金はすべて弟（現世の父）が負担したのだという。

しかし、腎臓病は悪化し、移植しか方法がなくなった。移植するためにはインドに行かなくてはならない。デシヤマンニイは新聞に嘆願書を掲載してもらって募金を集めることにした。その嘆願書が自宅に残されていたので、一部を紹介する。宛名は大統領だ。

嘆願書

大統領閣下

上記の住所に住んでいる私は結婚しています。重症の腎臓の病気があり、私の腎臓は二つともだめになっています。もう少ししたら死んでしまうでしょう。助かるためには腎臓移植しかありません。私の主治医はK氏で、カルテは下のとおりです。

私が出るためにはインドのマドラスにあるE病院に行かなくてはなりません。そのためには五〇万ルピーかかります。現在、毎日、薬をのんでいます。そのお金が月一萬ルピーかかっています。

そのため五万ルピーの寄付をお願いしたいと願っています。病院への支払いのためです。

(以下略)

嘆願書が新聞に載ったことで募金が集まった。足りない分は弟が自分の土地を売って工面し、移植を受けるためにインドに向かった。

六・三 腎臓移植したとき (アスリパーラの話)

——移植手術のことは覚えていますか。

前世記憶をもつ子どもたちの調査研究

アスリパーラ「自分が死ぬという緊張感があつたことは覚えていません。飛行機でインドに行ったことは覚えていますが。だれかと一緒に行ったことは覚えていますが、それがだれだつたかはわからない。マドラスのEという病院です。二六歳の女の年から腎臓をもらいました。顔も覚えていません。腎臓の値段は三万ルピーでした」

デシャマンニと、提供者の女性とのツーショット写真が残されている。小柄な女性だ。デシャマンニは背が高く、大きなマスクで顔を覆っている。

——顔は、いつもこの写真を見ているから覚えていような気がするだけではいりませんか。

アスリパーラ「違います」

——移植手術のお金は誰が出してくれたのですか。

アスリパーラ「弟です。土地を売つてお金を出してくれました」

——このように腎臓をくれた人と写真を撮る習慣があるのですか。この写真は、手術の前ですか、あとですか。

アスリパーラ「あとです」

——大きなマスクをしていますか、なぜですか。

アスリパーラ「ばい菌が入るのを防ぐためです。三カ月間、マスクをしているようにとお医者さんに言われました」

——移植してしばらくは調子がよかつたですね。その後、悪くなったということですが、そのことは覚えていいますか。

アスリパーラ「はい、覚えています。トイレに行こうとして転び、そのときから悪くなった」

——倒れたのは、病院ですか。

アスリパーラ「いいえ、家です。家のトイレです。体調はよかつた。家で療養した後、働くつもりでした」

——それでどうしたのですか。

アスリパーラ「病院に行きました。診察を受けて……」

——もう（命は）だめだというのは自分で理解したのですか。

アスリパーラ「はい」

——医者がそう言ったのですか。

アスリパーラ「はい」

——怖くなかったですか。

アスリパーラ「覚えていない」

父親「死ぬときは両手を合わせて拝みながら亡くなりました」

——覚えていますか。

アスリパーラ「はい」

——だれに対して拝んだのですか。弟さんですか。

アスリパーラ「だれに対してだったか、どうしてそうしたのは覚えていません。ただ、手を合わせたということ
は覚えていません」

（デシヤマンニイが亡くなったのは手術後一年後であった）。

六・四 病死後の中有での体験

——死後、何が起こりましたか。

アスリパーラ「死んだあとしばらく村の中を歩き回っていました。自分の体が見えました」

——どんな角度で見えたのですか。下から？ 右から？ 左から？ 上から？

アスリパーラ「上からです」

——どうやって見えたのですか。

アスリパーラ「歩き回っていたら見えたのです。お葬式も見た」

六・五 現世の母（前世の妻） スワルナの話

夫の死ぬ瞬間、妻のスワルナはその顔をじつと見つめていたという。だが、僧侶はそれを禁じた。いいところに生まれ変わることができないからだと言う。

スワルナ「お坊さんが、主人が死ぬ直前に来て、そこにいないでくださいと私に注意しました。そこにいると、いいところに生まれ変わることができないからと言うのです。でも私は、主人を一人ぼっちで旅立たせるのは嫌でした。それはできなかった。みんなが出て行つてから、私は彼の顔をじつと見て、私の顔もじつと見させた。亡くなったあともそこを離れないで、遺体のそばにいて、その部屋の床の上に寝ていました。

私は出家するつもりでした。この近くに、女性が出家できる寺があるのです。夫の葬儀が終わつてから、履歴書を送りました。そうすると面接に来るように言われました。

面接ではいろいろなことを訊かれました。そして、

『弟さんがいるでしょう。彼が何か考えているではありませんか』

と言われ、帰つて訊くように、そしてもう少し考えてから来るようにと帰らされたのです。

で、帰つたら、周囲の皆が弟と結婚したほうがいいと言う。それで主人の弟と結婚したのです。でも、その一方で、私の亡くなった主人が必ず戻ってくるように、私のものになつてくれるようにとお祈りしていました」

——それは、子どもとして生まれ変わつてくるようにという意味で祈っていたのですか。

スワルナ「いいえ。ただ、自分のものになると祈っていたのです」

七 おわりに

以上、三つの生まれ変わりの事例を、面接の再現という方法で報告した。筆者が注目したのは、非業の死を遂げた人物が生まれ変わってきたことが、家族、特に前世の家族に与える影響である。

前世研究は「あるか・ないか」で論じられることが多い。タッカーが、事例を保存するかどうかの判断基準に関して六項目の条件を出しているのも、その事例が「前世はある」のエビデンスとなりうることを保障させるためである。事例を集め続けているのも「前世はある」という仮説を、より強固に支えるためだ。だが、どんなに多くの事例を集めても証明は難しい。それは、人間が死んだらどうなるかが解明されていないからである。この問題についてもさまざまな仮説が立てられているが、現時点では最終的には個人が信じるかどうかというところに行きついてしまう。

筆者は前世研究において重要なのは、役立つかどうかだと考える。私たちが生きていくうえで「前世はある」とするほうが世の中に役立つか、ないとするほうが役立つか。あるいは個々人が幸福に生きられるか。今回のフィールドワークで観察したのは、生まれ変わりの子どもの中には前世の家族を救うということだった。前世でヘリコプター事故死したデシヤマンニイの家族は、その事故を契機として家庭崩壊状態になった。母親は人相が変わり体を動かすことができなくなつた。父親はアルコール摂取量が増えた。妹のナンダーが語っているように、幸福だった一家が不幸のどん底に落ちたのだ。アナガリカが存在が前世の両親を幸福にしたのは間違いないだろう。だからといって、前世と現世の人格はイコールではない。それはナンダーも、息子が殺されたスジャータも理解していた¹⁸。

また、人間は死ぬと消滅するのではないという傍証となるのも、前世研究の役立ち方の一つである。本報告はささ

やかなものであるが、その視点で行ったインタビューが前世研究に一石を投じることができたのではないかと考えている。

註・参考文献

- (1) 「NHKスペシャル 超常現象 科学者たちの挑戦」 NHK総合二〇一四年三月二二日放送。
- (2) ジム・B・タッカー著、笠原敏雄訳『転生した子どもたち—ヴァージニア大学40年の「前世」研究』（日本教文社、二〇〇六）三六ページ。
- (3) 一九一八—二〇〇七。同大に人格研究所設立後は主任教授をやめ、教授として研究に専念した。
- (4) イアン・ステイヴンソン編、今村光一訳『前世を記憶する20人の子供』（叢文社、一九八〇）、イアン・ステイヴンソン著、笠原敏雄訳『前世を記憶する子どもたち』（日本教文社、一九九〇）、同著、同訳『前世を記憶する子どもたち—ヨーロッパの事例から』（日本教文社、二〇〇五）。
- (5) 『転生した子どもたち—ヴァージニア大学・40年の「前世」研究』（笠原敏雄訳、日本教文社、二〇〇六）。
- (6) 『転生した子どもたち—ヴァージニア大学・40年の「前世」研究』によると六項目の条件とは以下のようなものである（三四—三五ページ、各項目に対する説明は省略）。
 - ① 再生の予言。
 - ② 予告夢。
 - ③ 前世に関係する母斑や先天的欠損。
 - ④ 幼時の中心人物による前世に関する発言。
 - ⑤ 前世の人格がなじんでいた人物や物品の、中心人物による再認。
 - ⑥ 中心人物の変わった行動。

(7) 平田篤胤著、子安宣邦校注『仙境異聞・勝五郎再生記聞』（岩波書店、二〇〇〇）。執筆は文政六年（一八一三）であるが、写本が何種類かあり、この本に収められているのは『平田篤胤全集 第八卷』（内外書籍、一九三三）を底本（平田家蔵本）としている。

同書の中にも、写本についての記述がある。文政六年六月末に清書を終え、まだ表紙も付けていないものを、七月二十二日に江戸を発つて京都に行ったときに携えていったところ、富小路治部江を通じて天皇にお見せする機会を得た。その内容が天皇の御心にかない、御所で写本したいということで五十日ほど手元に置かれ、篤胤のもとに戻ってきたのは十月四日であったという。その前後を拙訳で紹介する。

……天皇に（富小路治部江が）ご覧にいられたところ、たいへん御心にかない、繰り返しお読みになり、大宮御所（皇太后の御所、女院御所）にもお見せした。雲の上の人（高貴な人）の周辺でもときどきこのような珍しいことがある、江戸から来た篤胤というものが記しているのと同じようなことが、高貴な身分の方々の間でも起こったことを確かに聞いたことがあるということで、女房（女官）たちにこの本を写させるため、五十日ほどお手元に留めおかれた。本が富小路治部江殿のもとに戻ってきたのは十月四日であった。

本書のここかしこに折り目が付いているのは、御所で天皇がお読みになったとき付けたものだとお聞きした。たいへん畏れおおいことだと思ひ、朱色でその箇所にするしを付けておいた。そうして江戸に持ち帰りこの表紙を付けた。偶然にもこの本を読む機会に恵まれた人は、心して、決して粗末に扱わないよう十分注意をするように。（同書三六一ページ—三六二ページ）

この記述から、前世については記録されないまでも、口伝えの情報としてあり、それほど奇異なことではなかったということがわかる。

- (8) アメリカではホートン・ミフリン社、イギリスではコンスタンブル社から出版された。日本人の宗教観にまつわる事柄を一一紹介しているものの中の一編である。
- (9) 松谷みよ子著、立風書房、一九八六。
- (10) 柳田の表記のママ。
- (11) 「先祖の話」(『定本 柳田國男集 第十卷』 筑摩書房、一九六二 Ⅱ所収)、一四八ページ。
- (12) 同。
- (13) 同。
- (14) 『前世を記憶する子どもたち』五四ページ。
- (15) 『転生した子どもたちーヴァージニア大学40年の「前世」研究』二九ページ。
- (16) 日本の常識から考えると、二歳の息子と一緒に寝るのは不自然だが、スリランカは家族の結びつきが強い国なのでそれほど違和感はないようだ。子ども二人が中学生になっても家族全員と一緒に寝ている一家もある。中学生の子どもを持つ筆者のスリランカ人の友人は子どもに思春期はないと言っていた。
- (17) J氏はステイヴンソン教授にスリランカの情報を提供していた中の一人である。
- (18) 紙幅の関係で掲載できなかったが、筆者がスリランカで面接した事例はほかにもある。その事例でも同様の認識がなされていた。

※お断り：プライバシー保護のため本論文での面接調査に関わった人物はすべて仮名にしています。